

●ごんの変化に着目して、その原因や目的を具体的に想像していく。

そのためにまずは、1の場面でごんがどんなきつねなのかを捉える。

1 ごんがどんなきつねなのかを捉える。

○ごんはどんなきつねなのか。(1の場面)

- ・ひとりぼっち
- ・小ぎつね=子ぎつねではない
- ・夜でも昼でもあたりの村へ出て来て=時間帯に関わらず(1日中?), 村へ出てくる
- ・いたずらばかり=いたずらしかしない、他のことをしに来ることはない
- ・畑へ入っていもをほり散らす・菜種がらのほしてあるのへ火をつける・とんがらしをむしり取る→村の人からすると生活を脅かすようなことをする害獣である。

※二、三日雨が降り続いたその後、ほっとしてあなから出た後にしたことは、兵十へのいたずら。

このようにごんがいたずらに異常なまでに執着していること。その異常性に1の場面で気づかせたい。(なぜ、いたずらをするのかは、想像させても良いか。)

2 これまでのごんと比べて大きく変化しているところを見つける。

変化① これまでのごんなら絶対に言わないようなことやしないようなことを手がかりにする。

変化② 場面の移り変わり(5→6)に着目して、普通ならありえないことを捉える

ごんの変化①(2の場面)

ちよっ、あんないたずらをしなけりゃよかった。→1の場面でのごんから考えるとありえない発言。

○なぜこんなことを言ったのか。○そう思った原因はどこに書かれているのか。

この発言をしたごんのイメージを具体的に想像させていく。

調べさせたい箇所

そのばん、ごんは、あなの中で考えました。

考えたということは、何か解決したい問題や疑問があったということ。ごんが抱いていた疑問とは何なのか。

調べさせたい箇所

兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。

(ごんが抱いた疑問)

なぜ兵十はあの時うなぎをとろうとしていたのか。

- ・二、三日雨が降り続いた翌日の川 水がどっと増していた 兵十のこしのところまで水 普通はうなぎをとりにいくような状況ではないのでは？
- ・兵十のおっかあがどこについているのに、普通うなぎをとりに行くのか？ずっとそばについているのではないか？

(ごんが考えた末に出した答え)

兵十のおっかあは、どこについていて、うなぎが食べたいと言ったにちがいない。

ごんは兵十が荒れた川でうなぎをとっていたことに疑問をもっていた。さらに、兵十のおっかあが死んだことを知って、ますますこのことについて疑問が大きくなった。考えた末に、「兵十のおっかあがうなぎを食べたいと言ったにちがいない」という結論にいたった。疑問としてごんの頭の中にならなくなったことなので、なおさらごんの心に残るような出来事になったと考える。ごんのいたずらの目的は相手を困らせたり、悲しませたりすることが第一のものではない。それなのに自分のせいで、死に際の願いを叶えられずに兵十のおっかあを死なせてしまった。

ごんの変化② (5→6の場面)

へえ、こいつはつまらないな。→積極的に関わろうとする気持ちになれない。

おれは引き合わないなあ。→努力した結果が報いられない。

↓

その明るる日も、ごんは、くりを持って兵十のうちへ出かけました。

○どこで変わったのか？ 5場面と6場面の間を読むしかない。この間のことは子どもたちに想像させると対立が生まれることが予想される。

・気づいてほしい。

〈対立〉

・本当の意味でのつぐないがしたい。(気づいてほしくて出かけたわけではない。)

こちらの読みができると、物語としてはより心を揺さぶる読後感が味わえる。